

拝啓 今年も早や5月末となりました。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。近所の公園では、今はヤマボウシの花が咲いております。

今回は、小西芳之助先生の『コリント人への第二の手紙講解説教』からの引用の10回目、最終回となりますが、今回の「エンカウンター」の10ページ、「第1の感想——「弱き時に強い」」という項目には、次のようにあります。

「第1の感想——「弱き時に強い」

「大使徒の印」は「弱き時に強い」ということです。自分の弱い時に、キリストの力が自分に働きます。これが信者の「しるし」であります。信者は一見、弱く見えますが、しかし強い。「われ弱き時に強し」、これは前講で学びました。このパウロの言葉が分かるまでは、キリスト教をやめたらいけません。大きな仕事、立派な仕事は、何もキリスト教の信仰がなくても出来ます。それは、本質的なものではありません。キリスト者でなければできないことは、弱き時に強いということです。教育、物質生活の改善、心理学の応用は必要と認めます。しかし「弱き時に強い」という「新しき創造」(new creation)は宗教の独壇場であります。この「しるし」を解せざる限り、キリスト教は分かりません。「新しき創造」とはコリント後書の言葉であります。

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った。見よ、すべてが新しくなったのである。」(コリントⅡ 第5章17節)

この言葉を知るだけでも、コリント後書を勉強する必要があると、私は信じます。これは、キリスト教独特のものであります。」

「コリント第2の手紙講解説教」からの引用紹介は、本号をもって終わりになります。次号からは、「ガラテヤ書講解説教」から引用を致すことにいたします。

この一月に読んだ『一日一生』等の本から、感銘を受けた言葉を紹介します。

小西芳之助先生『主の御名を呼ぶ』4月25日

「ローラ・モーク先生

モーク先生(英語バイブルクラスの私の先生)は明治19年(1886)、米国でお生まれになり、昭和37年(1962)9月18日、オクラホマ州のドーバーでお亡くなりになった。先生は大正3年(1914)に日本に宣教師として来られ、昭和28年(1953)に故郷にお帰りになった。

先生の39年間の日本滞在中は、福音教会の神学校でお教えになり、かつ、幾つかの英語バイブルクラスを持っておられた。私は、先生の白山教会バイブルクラスの会員として、大正6~12年の間お世話になった。

先生は、誠に、天国への旅人であられた。先生のご生涯をもって、イエスが下される永遠の生命を証しなされた。

私は、先生に従いたいと思う。」

新渡戸稲造先生『一日一言』4月30日

「事に当たったなら全力をもって成し遂げんことを努むべし。小事たりといえども、精神込めざるものは遂に敗る。十分のものに十二分の力を入れれば、その事は遂げずとも必ず効あり。全力を傾注するだけの価なき事ならば、始むるに及ばず。仕事は気ごみが大切。」

松下幸之助先生『続・道をひらく』「刻一刻」

「これでよいのか。このままでよいのか。是と信じてやったが果たしてどうなるのか。うまくいけばいくで不安になり、つまずけばつまずくで心配する。あれこれと、とめどないけれど、とめどもないところに人の世の味わいもあると言えよう。

ただここで大事なことは、その不安、心配にいたずらに動揺しないことである。たじろがないことである。そして、新たな志をもって、新たな勇気を、刻一刻に生み出してゆくことである。刻一刻の不安の中で、刻一刻に勇気を生み出す。そこに人間の真の力がある。尊さがある。」

内村鑑三先生『続一日一生』5月10日

「キリストの十字架にキリスト教はある。十字架の道、これがキリスト教である。キリスト教に他に何があっても、もしキリストの十字架がないならば、キリスト教はないのである。キリスト教は、道德の道にあらずして贖罪の道である。そして贖罪は十字架の上におこなわれたのである。キリストは人に人道または天道を教えんために世に來たりたまいにあらず。人類の罪を負いてこれを除かんために來りたもうたのである。キリストの十字架に、この深い普遍的の意味がある。この意味において、十字架を解して、聖書と人生とを解し得るのである。」

パークレー先生「ウィリアム・パークレイの一日一章」イースター（復活節）

「われわれが人生に対処し得るのは、イースター信仰、復活していまなお生きたもう主に對する信仰によってである。

というのは、イエス・キリストが復活していまも生きておられることを信ずるとするならば、当然、すべての生は彼のおんまえにおいて営まれていること、私たちが一人では決してないこと、またキリストなしに努力したり、悲しみを忍んだり、誘惑に直面したりする必要のないこと、を信じないわけにはいかないからである。

イースター信仰は、一年のある時期にだけ考えることではなく、クリスチャンがそれによって毎日生き、それによって最後に死ぬ（それも再び生きるためだが）そのような信仰でなければならない。」

カウマン先生『山頂を目指して』5月7日

「あなた自身を見つめてはならない！ 自我に支配されてはならない。あなたは、自

分自身の魂の絵を見つめることによって、自分自身を絶えず再生し続けることができるに過ぎないのである。イエスを見つめなさい。彼を見つめるならば、あなたは栄光から栄光へと変えられるであろう。私たちのうちには、よいものは何もない。しかし、彼のうちには、神のすべての栄光と聖潔があるのだ！」

妻の和枝は、5月15日、富士霊園において、小雨の中、非常に落ち着いた雰囲気のうちに、早稲田教会古賀博牧師の御司式のもとに、納骨式を執り行い、埋葬いたしました。富士霊園は、御殿場にある大きな霊園ですが、5月11日に本誌読者の佐藤昭夫さんの車で、下見に行っておりまして、非常に助けられました。その時は、石館守三先生、石館基さんのお墓にもお参りをしました。

新型コロナは、私は、5月22日、第6回目のワクチン注射を打ちました。最近の電車の中では、皆さんマスクをされている人が多いようですが、しばらくは、マスク、手洗い、うがいなどはこれまで同様実行されて、十分ご注意下さるようお祈り申し上げます。

5月23日

山口周三

エンカウターの読者各位